60

フーフェラントの「医戒」と済生学舎の建学の精神について

幸野　健，唐沢　信安，山本　鼎，志村　俊郎，殿﨑　正明
日本医科大学医史学教育研究会

【佐倉順天堂における佐藤尚中と長谷川泰】

日本医科大学の前身，済生学舎の創立者である長谷川泰は，1862年より66年まで，西洋医学を佐藤尚中の佐倉順天堂において学んだ．当所において，長谷川泰は，毎月6回，師の佐藤尚中と共に，当時輸入された医学書の中でも最高レベルと考えられる「フーフェラント（Christoph Wilhelm Hufeland）の内科書（扶氏経験録）」の原典（Enchiridion medicum のオランダ語訳）を訳述し討論したと伝えられる．長谷川泰は原書巻末の「医師の義務 De Verpligtingen des Geneesheers（医戒）」の章を重視し，この章のエッセンスともいうべき「済生救民」の理念を終生の思想とした．

【済生学舎の開設】

1873年，佐藤尚中は大学東校別科を追われた医学生を救済するべく「済衆舎」を開設していた．死前に済衆舎の後事を託されていた長谷川泰は，1876年，我が国において現存中最古の私立医学校の一つである済生学舎を設立した．「済生学舎」という名称は，まさにフーフェラントの医戒の思想の発露と言えるであろう．「済生学舎開業願い」の「履歴」において，長谷川泰は，鈴木陳蔵（文台）と佐藤尚中の名を挙げており，前者より良寛，後者よりフーフェラントの思想の影響を受けたことを明らかにしている．

【生活困窮者のために奔走した長谷川泰】

同年，長谷川泰は東京府病院長を兼任することになるが，その後に彼が記した数多の生活困窮者への医療支援嘆願書は，正に「済生救民」思想を実行に移した証左といえる．また彼の草案した「区医職務心得」の第一条「区医ハ済恤（さいじゅつ：あわれみの心）ノ趣旨ヲ体認セシメ云々」は以上の思想を明確にしたものであろう．

【日本医学専門学校の校是】

済生学舎は，紆余曲折後，1912年に「私立日本医学専門学校」へと発展したが，学校経営者に不満を抱いた約400名の学生が総退学し「私立東京医学専門学校」を設置した．残された少数の学生で学校を再建するのは困難な事であったが，この時期において，理事の中原徳太郎（校長），塩田広重，小此木信六郎，近藤達児の4名は相談の上，小此木信六郎がドイツ留学中に購入したフーフェラントの書の「医戒」より，「己の金銭欲を捨てて多くの人々の為に尽くしなさい」という言葉に漢字をあてて「克己殉公」を建学の精神，すなわち校是と定めた．これは，「済生救民」同様，フーフェラントの「私心を去って医療に献身し，国家社会に対する責任を全うする」という理念をかかげた長谷川泰の衣鉢を継いで行く決意を明確にしたものと言えるだろう．

この校是は大学昇格後も伝えられている．ちなみに現在，フーフェラントの医戒を校是にしているのは日本医科大学と大阪大学医学部のみである．

【アララギ派の土屋文明】

土屋文明は群馬県の貧農に生をうけたが，小此木の援助で一高から東大に進学した．彼はその恩返しとして，日本医科大学予科で約10年間，修身の講義を行いフーフェラントの医戒を教授した．「命ぜられし　フーフェラントの翻訳は　年渡れるも果さざりけり」の短歌が今日残されている．

【校是と今日】

日本医科大学において，その精神が今も生きていることは，本学出身者の様々な記載（開業医院のモットーやインターネット上のブログなど）に校是がしばしば引用されることからも理解されるであろう．以上，済生学舎時代より，日本医専，日本医科大学にわたる，フーフェラントの建学の精神について述べた．